

第 61 回  
福井県保育研究大会  
報 告 書

主 催 福 井 県  
社会福祉法人 福井県社会福祉協議会  
敦 賀 市

# 目次

大会日程	・・・・・・・・	1
大会参加者数	・・・・・・・・	2
分科会報告	・・・・・・・・	3
第1分科会	新たな時代の保育実践 ～すべての子どもにむけて～	
第2分科会	配慮を必要とする子どもや家庭への支援にむけて	
第3分科会	保育者の資質向上を図る	
第4分科会	地域の子育て家庭への支援の充実にむけて	
第5分科会	子どものより良い育ちにむけた関係機関とのネットワーク	
第6分科会	「食を営む力」の基礎を培う食育の推進	
第7分科会	保育の社会化にむけて ～保育の営みをいかに社会に発信するか～	
第8分科会	公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割	
全体会報告	・・・・・・・・	23
大会宣言	・・・・・・・・	28

## 第 61 回 福井県保育研究大会 日程

### 1 分科会 ※web システム「Zoom」を使用したオンライン配信

時間／期日	1 日目 【6 月 14 日（火）】	2 日目 【6 月 15 日（水）】	3 日目 【6 月 16 日（木）】	4 日目 【6 月 17 日（金）】
10：00～ 11：50	第 1 分科会 「新たな時代の保育 実践～すべての子ども にむけて～」	第 3 分科会 「保育者の資質向上 を図る」	第 5 分科会 「子どものより良い 育ちにむけた関係機 関とのネットワー ク」	第 7 分科会 「保育の社会化にむ けて～保育の営みを いかに社会に発信す るか～」
14：00～ 15：50	第 2 分科会 「配慮を必要とする 子どもや家庭への支 援にむけて」	第 4 分科会 「地域の子育て家庭 への支援の充実にむ けて」	第 6 分科会 「食を営む力」の基 礎を培う食育の推 進」	第 8 分科会 「公立保育所・公立認 定こども園等の使命 と地域社会での役割」

### 2 全体会 110 分 ※Youtube による動画配信

（収録配信【期間 6 月 21 日（火）～6 月 27 日（月）】）

(1) 開会

福井県知事 杉本 達治  
福井県社会福祉協議会会長 小藤 幸男  
敦賀市長 淵上 隆信

(2) 研究発表 (30 分)

テーマ 「主体性ある保育を目指して ～一人ひとりに寄り添いながら～」  
発表者 高浜町保育研究会

(3) 記念講演 (60 分)

テーマ 『養護と教育が一体となった保育』の視点から保育の日常を再考する  
～子どもが現在を最もよく生き  
望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために～  
講 師 大妻女子大学名誉教授 大阪総合保育大学特任教授 阿部 和子 氏

(4) 大会宣言

櫛川保育園長 濱岡 美恵子 氏

(5) 次年度開催地挨拶

あわら市子育て支援課長 中道 佐和子 氏

(6) 閉会

福井県社会福祉協議会保育部会長 澤田 夏彦

## 第 61 回 福井県保育研究大会 参加者数

	第1分科 会	第2分科 会	第3分科 会	第4分科 会	第5分科 会	第6分科 会	第7分科 会	第8分科 会	全体会のみ	その他 (幹事等)	計
福井市	17	27	24	13	10	14	10	4	7	0	126
敦賀市	5	6	6	3	0	3	2	0	7	8	40
小浜市	3	4	3	3	2	1	2	2	10	0	30
大野市	10	12	6	1	3	6	4	1	0	0	43
勝山市	3	7	6	5	2	5	2	1	2	0	33
鯖江市	8	7	8	5	3	2	2	1	2	0	38
あわら市	4	6	4	3	4	2	2	1	0	0	26
越前市	8	9	8	4	5	10	4	2	6	0	56
坂井市	10	13	11	1	9	6	2	1	1	0	54
永平寺町	3	2	4	1	3	1	1	1	0	0	16
池田町	1	0	0	1	0	1	1	0	0	0	4
南越前町	2	3	2	1	0	1	1	0	0	0	10
越前町	2	7	4	3	2	5	1	1	3	0	28
美浜町	2	1	1	0	1	0	1	0	0	0	6
高浜町	3	4	2	1	1	2	1	0	3	0	17
おおい町	1	1	0	0	0	1	0	1	0	0	4
若狭町	1	2	1	2	1	1	2	0	0	0	10
その他 (学識助言者)	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	8
計	84	112	91	48	47	62	39	17	41	8	549

# 分科会



## 第1分科会 <新たな時代の保育実践 ～すべての子どもにむけて～>

司会者	ゆりかご認定こども園	主幹保育教諭	坊田 多磨希
助言者	福井県教育庁義務教育課幼児教育グループ 誓念寺こども園	主任 園長	坂ノ上 忍 藤井 道明
意見発表者	認定こども園大関保育園 おおい町名田庄こども園	保育教諭 主幹保育教諭	澤崎 春江 松井 智子
幹事・記録	気比保育園	園長	縄手 弥生

### 1. 意見発表の概要

#### ◎造形活動を通しての子どもと保育者の学び

- ・ 仁愛女子短期大学重村先生による造形あそび出前講座を受講しており、それを活かし廃材を使った造形遊びを実践している。子どもが存分に材料や道具を使うことができる環境を整備した。
- ・ 廃材を思う存分使いそして新たな道具（ホッチキス）を使いこなせるようになったこと、また環境の見直しや再構成などから、子どもの意欲と豊かな表現を実感することができた。
- ・ 遊びの後の振り返りを行い子どもが周囲から認められ、意欲の高まりを感じる事ができた。
- ・ 園内公開保育を行い、子どもの育ちを共有することが保育者同士の学び合いとなった。

#### ◎異年齢とのかかわりの中での育ちや学び

- ・ 子どもの生育環境の現状として異年齢の子ども同士の関わりが少なくなっている。子ども達より良い育ちや学びにつなげる保育実践として、生活や学びの環境づくり、保育者同士のコミュニケーション強化、園内公開保育に取り組んだ。
- ・ 共有スペースを活用し、興味や関心に合わせた環境の中で、異年齢の子ども同士が遊びを共有し、手伝う、教え合う姿が多くなった。また相手を思いやる気持ちが育まれた。
- ・ 園内公開保育による「遊びの中の学び」の伝えあい、環境の再構成、10の姿を捉えて話し合うことによって、保育士の視野が広がり子どもを多面的にとらえられるようになっていく。よりよい保育にしようという意識が高まった。

### 2. 討議の概要

#### ◎主体的な子どもを育てるための環境や関わり工夫について

- ・ 子ども達の遊びの様子を見守ることで子ども同士で学び豊かな発想へとつながる。環境を必要に応じて再構成していくことが大切と考える。物的と人的両面での工夫が不可欠である。
- ・ 他の職員と話し合い常に見直ししながら共有することで保育者同士のアイデアを出す場となる。
- ・ 子どもがいろいろな道具、素材、おもちゃを自由に使える環境を整えることが育ちや学びにつながる。
- ・ 子どもの思いを読み取る力をつけるために、つぶやきを記録することも有効。どんなことに興味を持っているのかを理解できる保育者でありたい。
- ・ 遊びの振り返りをする時間やそのタイミングが難しいが、子どもの思いが新しいうちに行うことでより良いものとなる。遊びを言語化し整えそれを共有するために大切だと考える。

---

◎異年齢児交流のための環境づくりや保育者のかかわりについて

- ・ コロナ禍になり異年齢児同士の交流が難しい中であるが、できることを工夫して行いたい。
- ・ 遊びを振り返る機会を作り保育者同士の共通理解、情報交換になるようにしている。
- ・ 大きい子の姿はそこに存在するだけで刺激となる。互いの存在を意識できるような保育者のかかわりも大切である。
- ・ 異年齢児同士でも遊べる共有スペースの確保は難しいけれどできることを考え工夫していきたい。
- ・ 保育者が積極的に名前を呼びかけるなど意図的に人的環境となる必要がある。
- ・ 子どもの様子を普段から保育者同士で話すことが交流のきっかけとなる。保育者同士の交流は不可欠である。

---

### 3. 助言者のことば

---

坂ノ上先生より

『澤崎先生の発表』

- ・ 子どもの姿から課題を見つけ環境の工夫がなされているところが素晴らしい。
- ・ 保育者が、遊びの振り返りの時間の中で子どもたちと遊びの中の学びを共有する場を作っていること、そして、その後の遊びの中でもPDCAサイクルが繰り返されていることがとても参考となる保育実践だと感じた。
- ・ 保育者は遊び方を教えるというより子ども自らの育ちを支えている。やってみたいという子どもの思いからアイデアを出し工夫する姿を温かいまなざしで見守りそして一緒に楽しもうとしている。

『松井先生の発表』

- ・ コロナ禍で保育が難しい実態があるが、これまでの保護者主催のお祭りごっこから子ども主体の活動となり子ども自身の大きな学びとなっている。
- ・ 保育士自身も子どもの遊びから学び、年齢発達に合った教育的価値のある環境づくりに今後も取り組んでいきましょう。

藤井先生より

『澤崎先生の発表』

- ・ 地域のいろいろな人材を活かした出前講座の活用をしながら保育の展開をしている。
- ・ ホッチキスを使った遊びの発展についても段階を踏んで展開されていた。
- ・ 子どもの「やってみたい」「やってみよう」「やってみたらできた」という行動はまさしく学びに向かう力が発揮されている。仲間と共同で小屋づくりに取り組む姿は保育の成果と言える。

『松井先生の発表』

- ・ 異年齢の保育というと一緒に何かをやることと考えてしまうが、コロナ禍のなか「これならできる」という思いをもって取り組んでいる。
  - ・ カリキュラムマネジメントを適切に行い、保育の質の向上につなげるような園内公開保育を行っていきましょう。
-

## 第2分科会 <配慮を必要とする子どもや家庭への支援にむけて>

司会者	和泉保育園	指導保育士	駒 久美子
助言者	福井県立大学 福井市子育て支援課	教授 保育専門官	清水 聡 武田 眞由美
意見発表者	いちひめこども園 あさひ保育所	指導保育教諭 主任保育士	林 みさと 前田 直美
幹事・記録	中郷西保育園	園長	小泉 由紀子

### 1. 意見発表の概要

#### ◎社会性を育む園の生活について考える

配慮を要する子どもにとって、園の生活を通してどのように社会性を育ていけるのかを考える。ろう学校幼稚部との並行通園。保護者とろう学校、園の3者で子どもの姿を共有。周りの子どもの姿を見せたり、保育者が実際にやって見せ「人」を見るよう働きかけることで友だちへの関心や関わりも増えた。全ての大人が全ての子どもに関わる保育をすることで、好きな時に好きな所で好きなだけ過ごす生活を送ることができた。また、友だちと共に過ごし関わる中で理解が深まった。笑顔で友だちと遊び、会話する姿を見て、地域の園で過ごすことの意義と可能性に気づくことが出来た。

#### ◎ひとりひとりがより良い生活を送るために

配慮を必要とする子が増えそれに伴い家庭への支援も多様化してきている。保護者との関係づくりの難しさもある中で、日常生活の中で困っているのは子どもであるということ念頭に置き、一人ひとりへの配慮すべきところを見つけ保護者支援に取り組む。子どもたちの成長発達の理解を深めるため観察記録の記入、ふくいっ子ファイルの活用、保育カウンセラーの巡回、清水特別支援学校の巡回指導など担任を交えカンファレンスを行いアドバイスをもらったり、町の保健師や児童発達支援センターとも連携をとり見学や保護者を交えてのカンファレンスを行うなど様々な機関と連携を持つことでみんなで一緒に考えていくという体制を作り上げていき、今後も一人一人がよりよい生活が送れるような人的・物的環境づくりに取り組む。

### 2. 討議の概要

#### ○外部機関との連携について

- ・ 保育カウンセラーの巡回や児童発達、就学支援、言葉の教室などと連携。アドバイスをもらい実践につなげている。
- ・ 療育センターなどの専門機関に見学に行き学ぶ機会がある。
- ・ 健診時の様子など保健師さんに丁寧にてもらい情報交換をしている。

#### ○保護者支援について

- ・ 園での様子などを写真や動画等で伝える工夫をし、保護者との信頼関係を作る。
- ・ 園全体で支援していくことが重要になるので職員間での情報交換や連携を密にする。
- ・ コロナ渦で保護者が園内に入る機会や行事の参加なども少なくなり関係作りの難しさを感じる。



### 3. 助言者のことば

～福井県立大学 教授 清水 聡先生より～

#### ○外部機関との連携

- ・ 様々な外部の専門機関があり、どのような内容で行っているかを知り連携をとることが大切である。
- ・ 外部機関と連携することで子どもへの関りのヒントをもらい保育に繋げることができる

#### ○保護者支援

- ・ 保護者とのコミュニケーションを密にし、信頼関係を作る。子どもの成長を大切にし、何かいい方法を一緒に考えたいというスタンスで寄り添う。
- ・ 園の職員同士で情報共有しておくことで園全体の信頼度になる。

～福井市子育て支援課 保育専門官 武田 眞由美先生より～

- ・ 複雑な思いをもつ保護者の子どもへの願いを知り共有し、子ども理解とともに信頼関係を築く。
- ・ 発達特性、診断ではなくその子が何に困っているのか？知ろうとすることが大切。それができるのが保育士、周囲の大人である。



## 第3分科会 <保育者の資質向上を図る>

司会者	浜っ子こども園	園長	車田 民江
助言者	仁愛大学 あわら敬愛こども園	副学長 園長	石川 昭義 渡邊 一幸
意見発表者	鯖江いずみ保育園 まつぶんこども園	副主任保育士 主幹保育教諭	宮口 綾子 園 里香
幹事・記録	新和さみどり保育園	園長	田辺 礼子

### 1. 意見発表の概要

#### ◎育ちを伝え合うフォトブックの活用

本や写真を通してエピソードトークや子どもの育ち、学びについて話し合う。また、クラス活動の様子や遊びの姿を保護者に伝えるツール「フォトブック」を活用し、子どもの心の動きや子どものつぶやきを意識して語り合っている。

日常的に職員同士が主体的に学び合う場や職員間での理解の共有が必要であると考え、試行錯誤しながら園内研修を進めている。写真を使って保育を振り返り、同僚と語り合い、気づいたことを共感しあうことは保育者のやりがいや仕事の楽しさにつながっていく。フォトブックを子どもの学びの場を伝え合うツールとしても活用し、子ども理解を深め、保育者同士が互いに問いかけ、助け合い、育ちあいながら、保育の質を高めていく。

#### ◎一人ひとりが輝ける職場作りをめざして

自分の得意分野や興味のある分野で能力を発揮することで保育の充実化を図るとともに、若手職員対象の研修を2か月に1度、主幹保育教諭がアドバイザーとなり行っている。フォトカンファレンスでは、園全体で一つのエピソードについて語り合うことで、保育や子どもを見る視点が広がり、お互いの保育を共感しあい、自分の自信へとつなげている。また、研修の感想や日々の悩みなど、主幹保育教諭と年間を通してやりとりしている取り組みは、個々のやる気やモチベーションアップにつながっている。

様々な取り組みを行っていく中で、子どもを見る職員の視線や関わり方が変わり、子どもの心に寄り添い、理解しよう、理解したいという気持ちが表れてきている。職員一人一人が同じ思いで保育にあたり、一人ひとりが輝けるやりがいのある職場づくりを目指していく。

### 2. 討議の概要

#### ◎ 資質向上に向けた園としての取り組み

- ・ 園内研修を行う。(経験年数に分ける・経験年数が交わるようにする)
- ・ 保育を見合う。良いところを認め合い、自信につなげる。(公開保育に参加)
- ・ ドキュメンテーションを作成し学びを伝え合う。
- ・ 外部講師を招き、カンファレンスや勉強会を行っている。
- ・ 夕方1時間その日の出来事を共有している。
- ・ 週に1回、子どもの見とりを語り合い、共通理解していく(発信力の向上)
- ・ 園内研修の記録を臨時やパート職員に回覧し、園全体で共有している。

- 
- ◎ 若手職員の育成を組織全体としてどのような働きかけをしているのか
    - ・ クラス編成に配慮する。(若手とベテランが組めるようにする。よく似た年齢の人を隣のクラスに配置し、悩みが相談しやすい環境にする。)
    - ・ ジョブコーチ制度 1年間、1対1で指導する。
    - ・ 園長や主任、アドバイザーなど面談の機会を作っている。
    - ・ 園長が保育を参観し、関わりなどをアドバイスしている
    - ・ 話ができる場や雰囲気を作る。日常的な会話、悩みを聞く、アドバイスをする。
    - ・ わかっていると思わないで、丁寧に説明する。
    - ・ 若手職員からの意見を取り上げ、保育ウェブを使った園内研修を行う。
    - ・ 早番や遅番のマニュアルを作っている。
    - ・ 若手職員同士のコミュニケーションの場を設けている。
    - ・ 交換日記(ノート)のやりとりをしている

---

### 3. 助言者のことば

---

<仁愛大学 副学長 石川昭義先生より>

- ◎ 研修の中で指針を読み直し、5領域の視点から捉え直すことを繰り返し行っていることはとても良い。保護者へ子どもの心の動きを伝えたくなくなったという気持ちは、保育者の専門性を表している。これからの発展として、毎日1枚作成し、1年分(2年分)たったフォトブックは、多面的な子ども理解となる。それを今後どのように活用していくか。子どもが自分の気づきとして撮ってきた写真を材料に親子や先生と対話する機会ができることでポートフォリオに発展していく可能性がある。
- ◎ メールのやりとりやフォトカンファレンスの取り組みなど、若手職員の育成につながっている。1年分のメールを本人に渡して振り返りのきっかけを提供していると同時に、主幹保育教諭自身の振り返りにもなっているのではないか。フォトカンファレンスを積み重ね、今後どのように発展させていくのか。また、カンファレンスの成果は、園児要録の作成にどのように生かしていくのかをつなげて考えていけるとよい。

#### ★まとめ

園の中で話し合う場、学びあう関係を作り、多様な視点を共有しながら、子ども理解を深めていく。そのためには、職員同士が安心して語り合い、問いかけ合い、考え合う習慣や雰囲気が大切で、それを通して子ども理解を進め、保育の質、保育者の資質を高めていく。そして、やりがいを持って働き続けられる職場づくりをしていく。

<あわら敬愛こども園 園長 渡邊一幸先生より>

- ◎ フォトブックは、子どものつぶやきや心の動きを上手につかみ取っていると感じる。写真や文字を通して伝えていくことで、保護者が子どもを見る目が少しずつ変わっていくのではないか。ビデオだと流れてしまう場面も、写真だと一瞬の動き、表情、姿をしっかりとらえる事ができる。保護者の子育てを振り返る場面にもなってくるのでは。この一連の取り組みを通して、職員のコミュニケーション能力が育ち、臨機応変に対応するスキルが向上する。また、若手保育者の離職防止にもつながっていく。
- ◎ 役割分担をすることで、専門性が高まり、保育に関する技術や知識、新しいことを学ぶことのスキルが向上していく。やりがいのある職場づくりをテーマに、PDCAをうま

---

く回して取り組んでいる。若手職員の研修は、離職防止につながり、若手育成、キャリアアップにつながっている。フォトカンファレンスでは、子どもたちの心の声や動きを理解し、言葉にしていくことで、クラスだよりというツールで保護者に伝わっていく。また、ICTを職員間のコミュニケーションツールとして活用し、職員のメンタルを安定させている。

★まとめ

保育者の質の向上に取り組んでいくことで、子のニーズの把握、保護者の満足度、子育ての振り返りや園全体の活性化につながっている。保育者自身の健康、保護者や職員間のコミュニケーション能力、保育者としての責任感、変化に対応する能力や向上心をもって、様々なツールを使って工夫して取り組んでいく。

---



## 第4分科会 <地域の子育て家庭への支援の充実にむけて>

司会者	認定こども園北新庄	園長	平井 真由美
助言者	福井市男女共同参画・子ども家庭センター	室長	安井 弘二
	子育て支援室・相談室 しろきこども園	園長	廣田 啓子
意見発表者	中名田保育園	園長	山田 陽子
	石田保育所	主任保育士	林 恭子
幹事・記録	粟野保育園	園長	山田 ゆき

### 1. 意見発表の概要

#### ◎地域とのつながりの中で子育て支援と保育園の役割

保育園であるからこそ出来る支援とは何か、この地域であるからこそ出来る支援とは何かを考え、保育の中に地域の方とのつながりを大切にした活動を取り入れる。

地域の方と触れ合い、子どもが自ら気づき考える子ども主体の実践の中で、地域の人への親近感や信頼感の芽生え、友達との協力関係、仲間意識の高まり、発信力の向上などの子どもたちに変化が見られる。また、保育園の活動を保護者に発信することで、園への関心の高まりがみられると共に、子どもたちの姿、思いを伝えることや保護者の思いを聞く経験が保育士の資質の向上につながり、そのことが子育て支援につながる。身近な人とかかわる楽しさや人との関わり大切さを伝えることが、家庭や、地域の子育て支援につながる。園はそのきっかけづくりをする役割を担っている。

#### ◎地域の子育て支援の拠点であるために～コロナ禍の地域子育て支援を考える～

これまで地域と連携して取り組んできた子育て支援事業ができなくなった状況下において、保育所が地域の子育て支援の拠点となることができることは何かと考え取り組む。

感染対策を図り工夫をしながら、夏祭りの実施、食に関する行事、他園や小学校との連携、保育士体験、日々の送迎時の保護者対応などを実施している。目の前の保護者を支援することに目を向け、保護者の人間関係を広げ居場所づくりをすること・子どもの育ちを伝えること・子育ての喜びを感じてもらうことを心がけ保護者対応を行う。また、保育士が、専門的な知識と技術を培い日々の保育の中で発達支援を行うことが大きな子育て支援になっている。これからも地域の子育て支援の拠点となるように支援を考えていく。

### 2. 討議の概要

#### ○コロナ禍における地域とのつながり

- ・ コロナ禍で様々なことが規制され保護者や地域とのかかわりが得られがたい。
- ・ 密を避け内容を工夫するなど感染対策をしながら実施しているが、地域の方が不安を持っているため、安心感を伝えていきたい。

#### ○保護者支援の充実

- ・ 保護者対応がすべて玄関先になり子どもたちの様子がわかりにくく相談しにくい環境になっているため、お便りの充実や送迎時のやり取りを大切に、保護者の方の悩みに対

---

応している。また、ドキュメンテーション、玄関にテレビを設置しスライドショーで様子を見てもらっている。

- ・ 子どもが活動しているところを見る機会が減っている。人数制限をしながらの保育参加、発表会、行事の動画を編集し配布するなど工夫している。

### 3. 助言者のことば

<安井 弘二先生より>

保育所主体で行事を行い保育園が地域のお年寄りなどの社会資源を集めることで、子どもに最善の利益を与えている。豊かな自然の中での実践は興味深く、子どもたちにとって一生忘れられない出来事となったのではないかと考える。園からの発信だけでなく、子どもの発信力が高まり保護者に伝わることにより、家族とのコミュニケーションの機会が多くもてたのではないか。

スマホ等の知識だけで子育てする難しさがあり、不安になっている方も多い中、保育士のソーシャルワークにより、子育ての意欲が高まる。子どもたちが、ワクワク感、緊張感を達成したことによる満足感につながっている。子どもが活動しているところを発信し、保護者同士が密にならないようにして行事等を行うと良い。父親の子育て参加を県も求めているが、保育士体験などでの父の参加がとても大切なことの一つである。

保育所は社会資源であり保育士もまた社会資源である。子育て支援の拠点として子どもに利益を与えていけるように今後も努力をしていく。コロナ禍の中、保護者の方が不安に思っていることがたくさんある。保育士が笑顔で迎え、短い時間でも安心してできるような声掛けをしていって欲しい。

<廣田先生より>

コロナ禍の中での地域とのつながりを持つのは大変だったと思う。今までのやり方でない参加の仕方を考える必要があったが、その中でもしっかりと支援がなされている。

地域の少子化にあって、少子化になればなるほど地域の方も減っていく。いかに子どもと地域の人とが一緒になり、その地域を盛り立てていくのが大切になってくる。意見発表における保護者への発信の仕方については、個人だけではなくその日の活動を伝える工夫がされており、その大切さを改めて思う。人とのつながり、地域とのつながりの再認識する中で、地域に救われ、助けられ、守られ、育てられているということを地域の方に学ばせてもらっていると感じた。

保護者対応について、保護者の安心を続けるためには、密を避け人数制限をするなど場の工夫実施の仕方を考える等がある。保育の内容や行事や意識の持ち方を変えていく必要があるが保育を随分変えていかなくてはならないという現実があったが、やってみて良かったこともある。コロナ禍の中でも保育をより充実させ、子ども自らが思いきりできる活動を取り入れ情報交換し、みんなの不安をどのように解消していくと良いか考えていくことが大切である。

## 第5分科会 <子どものより良い育ちにむけた関係機関とのネットワーク>

司会者	あおなみ保育園	副園長	牧野 佐也佳
助言者	仁愛大学 春江ゆり保育園	准教授 園長	青井 夕貴 武田 昭裕
意見発表者	社中央第二こども園 志比幼児園	教頭 園長	荒谷 弥生 竹内 直美
幹事・記録	つくしんぼ保育園	園長	竹中 美紀

### 1. 意見発表の概要

◎～園と家庭と地域の三位一体の子育て支援をめざして～

園・家庭・地域が三位一体となって地域の子どもたちを育てていきたいと思い、地域との関わりについてアンケートを取り、保護者支援をどのように取り組んでいくとよいかを検討する。

アンケートの結果を踏まえ、園周辺の地域の関係機関や保護者家庭向けに園児のお散歩コースや地域の情報ガイドのチラシなどを作成し、配布を実施した。そうすることで、チラシを見て公園に行き、きれいな花を見に行ったり、地区のイベントでお友達ができたことなど園児や保護者からいろいろな声が聞かれ、少しずつだが、地域に関心が出てきたように感じている。これからも園・家庭・地域の三位一体で地域全体がつながる子育てを推進して、周囲、地域の健全な子どもの育成に心がけていきたい。

◎～コロナ禍の中での関係機関とのつながり～

新型コロナウイルス感染拡大という大きな災害に遭遇し、保育現場でも感染対策や保護者支援対応に今までとは違う取り組みを求められていることが多くなっている。その中でも、気がかりな子どもの様子の情報共有については来園していただくことが難しくなったことで関係機関とのつながりに課題を抱えていた。しかし、IT機器の利用が進み、オンラインでの相談や撮影した動画の共有により、今まで以上に見ていただきたい姿をピンポイントで共有でき、専門機関との連携ができた。想定外の災害や感染症が起こりうる現状の中で大切な幼児期の育ちをサポートするためのネットワークを今後もしっかり整えていきたい。

### 2. 討議の概要

○家庭と地域をつないでいくために、地域を知るために園として行えることはなにか

- ・ ドキュメンテーションを使って保護者の方に園での様子をお知らせする。(園の玄関・ラインの公式アカウント等)
- ・ 地域の方に畑での活動に携わっていただき、公民館に園だよりを配布するなどの実施を行っている。
- ・ これまでに培ってきた取り組みをいかに継続してできるかを考えて行うことが大切だと思う。

○コロナ禍の中で関係機関とのつながり方で工夫している事や取り組みたい内容

- ・ 参観ができないので、食事の様子などの動画を保護者に見せて、子育て支援に活用している。

- 
- ・ 幼保小接続が以前より希薄になってきているが、Zoom等のオンラインを使って小学校の様子を見ている園もあると聞き、できることを見つけていくことが必要だと感じた。
  - ・ 保育カウンセラーや専門の方々には直接来ていただき、実際に見ていただくのが望ましいと思われていたが、IT機器の導入によりオンラインで行うことも可能になっている。意見発表の園の取り組みを参考にしたい。

---

### 3. 助言者のことば

---

◎～園と家庭と地域の三位一体の子育て支援をめざして～

<青井先生>

○アンケートをとろうと思ったきっかけは？

→コロナ禍で祖父母との交流が希薄になり、そうなることで地域との関わりも薄くなってきていると感じていた。祖父母との関係が地域との橋渡し役につながるのではないかと思ひ、チームを作って園全体で取り組んだ。(荒谷先生)

○子どものより良い育ちにとって大切なことは、地域全体でつながる子育てであると考えられる。園が中心となり、地域と家庭との相互作用が子育て支援をより豊かなものになっていくと考えられる。この取り組みを通して改めて感じる事ができた。

<武田先生>

○地域での三位一体による子育て支援を進めるための保護者アンケートを踏まえた検討会を行う事で、保護者やその家庭を取り込んだ、地域連携による子育てネットワークを構築できた素晴らしい発表だった。

○子どもが日常の家庭や園での生活では体験できない、地域社会での生活体験が重要と言われており、地域住民との触れ合いや地域社会での生活体験、すなわち地域と連携した保育が求められているので大切にしていきたい。

◎～コロナ禍の中での関係機関とのつながり～

<青井先生>

○活動が制限されていく中で、保護者の方の希望はあったか？

→保護者の方のどうにかして子どもの様子を見たいという思いがあり、蜜を防ぎながらできることは何かを園の中で考えていった。(保育参加→1クラスの中で人数を分ける・運動会→分散型など)(竹内先生)

○ICTの活用において、メリット・デメリットは必ずある。その中で何を選択し、取り入れていくかを考えることが大切。

○コロナ禍で何もできないではなく、制限のある中で、何ができるかを模索していくことが大切だと考えられる。

<武田先生>

○様々な機関による園訪問等の実施において、新型コロナウイルス感染対策のため各関係機関とのつながり方、連携方法にもコロナ禍の中での新たな取り組みとして、インターネットなどのIT活用による連携を行ったことなど、とても興味深く、また、参考にしたい事例であった。

○子どものより良い育ちを考え、関係機関とつながるために必要かつ有効な方策と考え、研修などで自己研鑽をしながら、大切な幼児期の育ちのサポートのためのネットワーク構築について、この研修を機に取り組んでいくことが大切。



## 第6分科会 <「食を営む力」の基礎を培う食育の推進>

司会者	池田町なかよしこども園	主幹保育教諭	笹木 巖美
助言者	仁愛大学人間生活学部健康栄養学科 あすなる保育園	講師 栄養士	細田 耕平 小林 芳恵
意見発表者	木崎保育園 上太田保育園	園長 園長	原田 弓子 天勝 かおり
幹事・記録	松原保育園	園長	川瀬 朋子

### 1. 意見発表の概要

#### ◎【楽しく食べる子ども像】の実現に向けた取り組み

- ・ 現状の子どもたちの姿から、保護者へのアンケートや園内研修で出た結果をもとに、好き嫌いをなくすため、まずは食に興味を持ち楽しむという土台作りをした。お芋week、ミステリー畑など、ワクワクするような食育活動を通じ、地域の方、保護者、保育士と共に検討と改善を繰り返しながら断続的に行っていくことが、楽しく食べる子ども像の実現には大切だということが分かった。

#### ◎【園全体で取り組む食育の実践～コロナ禍の中で～】

- ・ 生活スタイルや異文化の家庭が多いことから、子どもの食生活が乱れている現状の中、職員間で食育の見直しと食育への意識向上を図る。コロナ禍で改めて自分たちを支えてくれる人たちの存在や温かさが感じられるように意識し、体験の中で子どもの学びに目を向け子ども主体で進めていったことで、園全体で活動や子どもの育ちを共有し、食育活動を保育者自らが楽しみ食育は楽しいという保育者自身の意識の変化に繋がった。

### 2. 討議の概要

「食を営む力」を育てるために、どのような工夫をしているか？

- ・ お腹がすく活動を取り入れる（体を動かす活動）五感を刺激し食欲UPを図る。
- ・ 担任だけでなく、調理員や栄養士も一緒に関わる。
- ・ 野菜の栽培や給食等で提供する食材の皮むきなどを通して食に興味関心を持てるようにする。
- ・ 食に関することをホームページに掲載し、家庭にも発信する。

### 3. 助言者のことば

#### ●仁愛大学細田氏からの助言

保育士自身が食育を楽しむことで、子どもがその楽しい雰囲気を感じ食に対し興味関心を持つきっかけとなる。園での食育は子ども1人1人が食べることの基礎である「食べる力」を身につけるために、園生活の中で積極的に関わっていくことによって身につけていくので、保育士自身が食育に関心を持って関わるのが大切である。

#### ●あすなる保育園小林氏からの助言

子ども達と保護者が食べ物を話題にできるよう、園側が種を撒く。その種はやがて子どもの成長発達にかけがえのないものとなる。保護者も子どもと一緒に食を楽しむ経験を積み重ねることで保護者自身が自身の食を振り返るきっかけとなるのではないか。保育の一環としての食育であるため、食育は全ての子どもを育てる根幹となり、全て食に繋がっていく。コロナ禍は異業種間の相互理解を深めていく良い機会ととらえ、子どもの立場に立ってより良い食育を考えていかなければならない。小さな子ども達に関わる人間として一生懸命に手を携えていくのが大切である。



## 第7分科会 <保育の社会化にむけて

### ～保育の営みをいかに社会に発信するか～>

司会者	春江西幼保園	園長	徳田 由美
助言者	仁愛大学 愛星認定こども園	名誉教授 園長	西村 重稀 山口 里美
意見発表者	あさひこども園 気山保育所	副園長 保育士	古市 まゆ美 深川 朝子
幹事・記録	中郷保育園	園長	池澤 純子

#### 1. 意見発表の概要

◎テーマ 「地域との交流こそが保育の発信につながる」

あさひこども園副園長 古市まゆ美

地域での交流会や家庭学級などを通して、園、家庭、地域社会が密接に連携を取り、探検や体験活動をしながら、自らやろうとする主体性を重んじた保育に取り組んでいる。

○子育て拠点として（家庭学級講座・子育て支援）

○地域との関わりを通して（地元小中学校、東消防署との関わり）

○地域の行事に参加して（遺跡祭り、JA組合員の集いに参加）

○地域施設との交流（地域老人施設との交流・中日本高速道路との交流）

○地域ボランティア（絵本の読み聞かせ・花育講座）

○0歳児からの学びに向かう力を発信

<今後の課題>

- ・地域との交流こそが保育の発信につながり、子ども達を地域社会で健全に守り育てられていく力になっていく。今後も、安心して子どもを産み育てることができる社会環境づくりをしていきたい。

◎テーマ 「地域の中で共に育ち合う保育所を目指して」

気山保育所保育士 深川朝子

子どもが成長するためにはいろいろな人との関わりが大切。保育や行事などを通じて地域の人との交流を深めている。

○保護者とのつながり（保育士体験・保護者会活動）

○学校・地域とのつながり（小学校、地域の合同体育大会に参加）

○地域の特色を保育に取り入れる（食育体験・給食に地元の食材を入れる）

地域づくり協議会に保育所も入ることで地域の一員として見守られている。地域の方々との交流により、子ども達がいろいろな大人に関わる機会が増えた。

<今後の課題>

- ・コロナ禍で感染予防をしながら交流の場を設けることが課題。
- ・地域の中で育つ保育所であり続けられるように、今後も保育所での様子を地域に発信し続け、共に育ち合っていきたい。

## 2. 討議の概要

<討議の柱・・・園から地域へ発信するものは何か、地域から何を学ぶか>

### 1. 園から地域へ発信するものは何か

- ・ 地域の方々や高齢者との交流は、お互いにとってよい刺激となる。園の取り組みや子どもの姿、育ちを知ってもらったり、保育の楽しさや子育ての面白さを発信していきたい。
- ・ コロナ禍で行事や交流が難しくなっているが、その中で何ができるか広げていく視点を持ち、園から歩み寄っていく工夫が必要である。

### 2. 地域から園が何を学ぶか

- ・ 園の中でのつながりだけでなく、地域の行事や文化に参加して様々な人との関わりの中で学ぶことが大きい。園だけでは難しいことも地域に相談し、巻き込みながら保育ができるとよい。
- ・ 地域の方との関わりの中で、伝統や知恵、話し方やマナーなどの社会性を学んだり、自分が愛され必要とされていることを感じられる。今後も私達が地域のことを知って学んで発信していくことで、地域に精通している方の力をお借りしていくことが大切である。

## 3. 助言者のことば

### ・ 山口先生より

近年、社会情勢の変化により、子育てに不安を抱える保護者が増加している。保育園の取り組みや方針を社会にどう発信していくか、地域社会と連携してどう保育園に取り入れていくかが大切である。

あさひこども園の地元のお祭りに参加する取り組みは、次の世代へと受け継がれていく地域との文化交流であり、そこにこども園が参入して社会へと発信し続けていくことは大事な事である。気山保育所の老人会との交流を通して、地域の方は地域の子を育てようとする温かい気持ちが深まり、子どもにとってはシニア世代の人から多くの知恵を学ぶ場になる。

今後も保育園の社会化が更に充実するとよい。

### ・ 西村先生より

保育活動や園の取り組み、保育園の中で育まれている学びや育ちに関わりのない人にも知ってもらうことが大切。ホームセンターや中日本高速道路との交流により、地域の職員との人間関係の構築をすることが大事。日頃から関係作りをすることで、いざという時に協力してもらえる。

これからの保育園、認定こども園は、地域の中にある乳幼児の子育ての専門機関として、園児だけでなく、地域の子育て家庭への支援（支援センター）としての役割を担うことが大切。少子化社会の中で、地域の乳幼児保育の専門家として子育てのキーパーソンとなり、社会全体で子どもを守っていくことが大事である。

## 第8分科会 <公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割>

司会者	野向保育園	園長	漆屋 満里江
助言者	仁愛大学 小浜市民生部子ども未来課	教授 課長補佐	森 俊之 中本 玲子
意見発表者	上北野保育園 あかね保育園	園長 園長	横田 千春 大久保 和代
幹事・記録	三島保育園	園長	芝 京子

### 1. 意見発表の概要

#### ◎コロナ禍での「実習生受け入れ」の現状と取り組み

- ・ 福井市アクションプログラム カテゴリーIV「子育て文化を育む」の取り組みの一つとして「教育・保育体験の受け入れ」に力を入れている。
- ・ 新型コロナウイルス感染対策を講じての保育実習生の受け入れ、取り組みについて。
- ・ 実習生の指導については「実習生の気づきや疑問」を丁寧に受け止め、対話を重ね、子どもとの関わりを楽しめるように配慮している。
- ・ 養成校との連携について、令和4年3月に福井県で初めての実習指導者研修がオンラインで開催された。また、県内の養成校との大学連携協定のなか、合同研究発表会を行っている。

#### 【まとめと課題】

- ・ 国や県の動向を敏感にとらえた感染対策を講じながら安心して実習ができる体制を継続していく。
- ・ 実習生と保育者の語り合いがお互いの資質向上につながり、保育の未来を作っていく。
- ・ 養成校との連携の仕方について検討を重ね、私立園も含め地域への発信という大きな役割を担うための方法を探っていく。

#### ◎医療的ケアを必要とする園児の保育と関係機関との連携

医療的ケア児の保育について、公立園であることの利点を生かし各関係機関と連携をとりつつ問題を一つずつ解決していく。

##### 1 家族との連携

- ・ 保護者、かかりつけ医療スタッフ、市役所担当職員、保健師、看護師、園長、調理師、担当保育士で入園前面談を行う。

##### 2 医療ケアを行う職員体制

- ・ 職員体制については市役所担当課と相談して決定。

##### 3 医療機関や療育機関との連携

- ・ 慣らし保育期間は保護者、クリニックの看護師と一緒に登園し、日々の生活や医療ケアの仕方を具体的に伝授。

- 
- ・ 療育機関職員の園訪問やアドバイス。
  - ・ 消防署との連携による緊急搬送訓練。
  - ・ 病気や体の状態、疾患への具体的な対応の仕方について担当医師、ケアマネージャー、看護師、言語聴覚士等と会議を行う機会を設ける。→「わくわくすくすく会議」

#### 4 感染症のリスク

- ・ 感染症発症時にはすぐに保護者に連絡を入れ、状況に合わせて園を欠席する対応。

#### 5 他の子ども達との関係

- ・ 周りの友達の様子がよい刺激となっている。周りの子もスムーズに受け入れ。

#### 6 小学校との連携

- ・ 新年度スタートしてすぐ、就学にむけての準備を始める。市教育委員会、支援学校からの園訪問。保護者との懇談。

### 【まとめと課題】

- ・ 医療的ケア児を受け入れることで、多様性を認めることができる環境ができた。
- ・ 全ての子ども達はみんな平等に保育サービスを受けることができなければならない。そしてそれができるように精一杯努めなければならない。
- ・ 公立園であるという利点を生かし様々な機関との連携が必要である。

---

## 2. 討議の概要

---

### ○コロナ禍において、各園の地域への発信について

- ・ 実際コロナ禍において地域への発信は難しい。公民館にチラシを置く、HP を利用するなどしている。
- ・ 各園、今年度より少しずつ動き出している。地域との交流行事は人数制限や時間短縮を行い、屋外での実施等の工夫で再開している園もある。
- ・ 学校との連携において、戸外での活動は比較的行いやすいので、どのような方法なら可能か模索している。
- ・ 地域の行事への参加については、どのような形なら参加できるのか考えていく必要がある。

### ○各園におけるネットワークを生かした関係機関との連携について

- ・ 各関係機関とZOOMを使っての会議。→市役所担当課との会議、小学校との連携会議。
  - ・ 就学前の学校体験ができない状況にある。→小学校から学校生活の動画を送ってもらったり、小学生が作ったおもちゃを届けてもらったりしている。年長児の安心感につながっている。
  - ・ 気がかり児に関しては各園、ネットワークづくりや連携がとれている。医療的ケア児の受け入れに関しては、医療機関との連携が上手くとれていないという園もあり、どのように連携していったか知りたい。
-

### 3. 助言者のことば

- ・ コロナ禍での「実習生受け入れ」の現状と取り組み

〈中本先生より〉

実習生を受け入れることが保育士の保育を見直すきっかけとなり、実習生に保育を伝えることで保育士自身の保育力向上につながる。また、実習生受け入れは保育の魅力伝えるよい機会でありチャンスでもある。コロナ禍にありながらも実習の持ち方を工夫し、コミュニケーションを大切にしてきたことで実習生も安心して実習に臨むことができたと感じる。

今後も実習生が知りたいこと、興味をもったことを上手く引き出しながら保育の楽しさや、やりがいを伝えていってほしい。

〈森教授より〉

実習生との保育の語り合いを大切にしながら、その中で保育の楽しさをどのように伝えていったらよいかということであったが、そのような視点でとらえれば、実習の在り方も無限に広がる可能性がある。

現場で保育を一緒に行うことで、保育の楽しさを考えることができ、語り合いを通して実習の楽しさや辛さを伝えることもできる。

今回のテーマは公立園の使命と地域社会での役割。仁愛女子短期大学との研究発表は特定保育所の研究発表が福井市の公立園全体の取り組みとなり、さらには私立園への誘いかけが行われながら広がっていった。いろいろな取り組みを市町村全体に広げていくというのは公立園の一つの役割、使命として大切である。

今回の意見発表は内容が盛りだくさんであったが、タイトルひとつに絞って、どのようなプロセスで話し合いが進められ充実していったかというような細かい流れが具体的に伝わると、各園で取り入れやすくなるのではないかと。

- ・ 医療的ケアを必要とする園児の保育と関係機関との連携

〈中本先生より〉

医療的ケア児を受け入れるための人材確保ができるのか、環境はどうかという様々な問題を解決し、さらには、受け入れの準備、各関係機関との連携、情報共有、安心安全の確保等、大変だったと思う。コロナ禍ということもあり、今まで以上に感染症対策や健康状態の把握等に気を張ったことと思われる。

医療的ケア児も他の子ども等しく健やかな保育を等しく保障できるように全職員が同じ意識で関わっている様子がうかがえた。職員間の連携、各関係機関との連携の重要性を改めて感じる。

公立園は公的機関との連携が取りやすい。今後は公立園だけでなく私立園にも広がり、医療的ケア児をもつ保護者目線での連携が取れるようになっていくとよい。

〈森教授より〉

医療的ケア児の受け入れに関して大変なことが多かったと思う。状況が分かり易く発表されていた。

最初はその子の状況にあった年齢のクラスからスタートし、いろいろな人たちの意見を聞きながら同年齢クラスへ入れるようにとステップアップして受け入れをしていったことは素

---

晴らしかった。

最初受け入れが大変だと思っていたが、結果としてそれ程大変ではなかったということについて、園の中で話し合っていくとよいのではないかと思う。

全体まとめとしての助言

〈中本先生〉

コロナ禍という状況であるからこそ、職員間及び関係機関との連携が大切。行事の縮小、日々の保育の見直し等迫られる中、今一度行事のもつ意味や園児に対しての丁寧な関わりについて考える良い機会となったのではないか。

公立園はいろいろな資料や情報が得やすく、公的機関との連携も取りやすい。私立園も巻き込んで具体的対応や関係機関との連携を進めていけるとよい。

〈森教授〉

コロナ禍でできないことが多い。非常時だからこそ、本当に大切にしなければいけないことは何かを見直す機会である。

保護者に正確な情報を伝えていくことが大切で、普段以上に情報発信とその方法を考えていく必要がある。

公立園の意義や役割として、公立園はバランス性と理想の追求が可能。良いところを標準化し、広げていくことが役割ではないか。

---





# 全体会報告



# 第 61 回福井県保育研究大会 全体会

## 開会挨拶



主催：社会福祉法人 福井県社会福祉協議会

会長 小藤 幸男



主催：敦賀市

市長 瀧上 隆信

# 研究発表

8. 課題と展望



常に疑問を持ちながら保育をしていく

本当に集団の中で子ども一人ひとりの思いが反映されているのか、また、思いを汲み取ったつもりになっていないか。



保育者の主観にとらわれずに  
だからみんなで話し合う  
記録で違うタイミングで振り返る



違う捉え方を知ることが大事



**研究発表**  
主体性ある保育を目指して  
～一人ひとりに寄り添いながら～

高浜町保育研究会ひっか  
認定こども園cocokara  
主幹保育教諭 高木利佳

テーマ：  
「主体性ある保育を目指して  
～一人ひとりに寄り添いながら～」

発表者：高浜町保育研究会

## 高浜町が取り組んでいる「就学までに育てたい10の姿」



1. 自然との関わり・生命尊重  
2. 思考力の育生  
3. 社会生活との関わり  
4. 友達と一緒に遊ぶ姿  
5. 言葉による伝え合い  
6. 思いやり  
7. 好奇心  
8. 意欲  
9. 責任感  
10. 自己肯定感

# 記念講演

●養護及び教育はPDCAサイクル  
保育を考える視点

PDCAサイクルの循環 (継続的な改善)

Plan (プラン) 計画

Do (ドゥ) 実践

Check (チェック) 振り返り・評価

Action (アクション) 改善

行為後の省察 (行為の中の省察)  
・行為(状況との対話含めて)について省察  
・自己との対話

状況把握・見通し (orient)

観察 (observe)

判断 (decide)

行動・関わり (act)

出来事(子どもの関わり)のただなかでの保育者の「見るから行動する(関わり)」までの内面の流れ (OODAループ)→状況との対話(行為の中の省察)

https://www.orihara.co.jp/product/michi/bn013.htm#2021.10.14取得 保育実践のPDCAサイクルに改良


●関わりの中では、養護と教育が一体的にということは意識されていない。その出来事の当事者同士として、直感的に、その場の息遣いを感じながら関わる

●関わりにおける養護の側面、教育の側面が意識化されるのは、かかわりの場を離れて振り返り(評価)、計画を立てるときである

●振り返り(評価)をきちんとすることが、選択力を高める子どものかかわりの場における養護の対応をする可能性が高くなる

**記念講演**

『養護と教育が一体となった保育』の視点から保育の日常を再考する  
～子どもが現在を最もよく生き望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために～



大妻女子大学名誉教授  
大阪総合保育大学大学院  
特任教授  
阿部 和子氏

テーマ 『養護と教育が一体となった保育』の視点から保育の日常を再考する  
～子どもが現在を最もよく生き望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために～

講師 大妻女子大学名誉教授 大阪総合保育大学 特任教授 阿部 和子

大会宣言



敦賀市櫛川保育園長 濱岡 美恵子

次年度開催地挨拶



あわら市子育て支援課長 中道 佐和子

閉会



福井県社会福祉協議会保育部会長 澤田 夏彦

# 大会宣言

ここのたび、「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして」をテーマに、第61回福井県保育研究大会が開催されました。

一昨年来、大波小波を繰り返し、未だ収束が見通せないコロナ禍の今、ウィズコロナを念頭に置いた社会経済活動が活発化しています。保育現場にあっても、この間、保育従事者は子どもたちの安全を前提にし、その健全な育みの上で必要な教育・保育の提供について試行錯誤を繰り返し、子どもたちの立場にたった実践に努めてきました。

一方で、この感染症の蔓延により、人々の生活スタイルは一変し、これによる家族関係や生活環境の変化などによる影響で、子どもが虐げられ、犠牲となる悲しい事件が今も後を絶ちません。また、世界では、戦禍、家を焼かれ故郷（ふるさと）を追われ、家族や友人、自らの未来をも奪われた子どもたちは決して少なくなく、被害は拡大しています。

これら今般の予期せぬ出来事は、健康や生命（いのち）の尊さとこれを守ることの難しさを私たちの心に深く刻み、保育従事者として子どもたちにこれらを将来に亘り語り伝えていくことの使命を一人ひとり改めて考える契機ともなりました。

私たち保育従事者は、取り巻く社会がどのように変化しても、子どもたちが自他ともに生きることを大切にする心を育み、道徳や規範意識が芽生える重要な時期に傍にいる大人として、本大会を機に、常に次のことを念頭に置き、彼らが遊びを通し総合的に発達していく姿を明確に描き、知恵を出し合い、工夫しながら保育実践にあたることを、ここに宣言します。

- 一 私たちは、子どもの最善の利益の保障はもとより、家庭や地域と連携し、こども園や保育所等の利用の如何を問わず、保護者に対する子育て支援に努めます。
- 一 私たちは、専門職として常に教育・保育の質の向上を目指すとともに、その取り組みを広く保護者や地域に伝えるよう努めます。
- 一 私たちは、教育・保育を通して子育ての楽しさ・食べる楽しさ・子どもの成長の喜びなどを共有しながら、親も子も育つ環境づくりに努めます。
- 一 私たちは、心身ともに健やかな成長を支える上で必要な教育・保育について、子どものみならず私たち自身も育ち合う仲間として、職場の内外を問わず積極的に議論し、提案します。

令和4年6月

第61回福井県保育研究大会